

# 講演 — 鞠智城の築造時期と貯水池について

## 講演者紹介

赤司 善彦（あかし よしひこ）

明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館を経て、現在、九州国立博物館  
展示課長。大宰府政庁跡の発掘調査に長年携わる。

専門は日本考古学。

# ・講演一 「鞠智城の築造時期と貯水池について」

赤司善彦（九州国立博物館展示課長）

## はじめに

こんにちは、赤司でございます。拍手でお迎えいただき、ありがとうございます。

私に与えられたテーマは「鞠地城の築造時期と貯水池について」であります。先程、矢野さんから、鞠智城についての新しい成果を発表していただきました。鞠智城というのは江戸時代のお城のような天守閣が無いことは皆さんご存知だとは思うのですが、古代山城の一つである鞠智城の特徴として、周りに城壁が巡っていること。お城の出入りをする城門があるということ。それから内部に建物があるということ。さらには谷を塞いで貯水池を造ったということ。そのようなご報告がありました。

私の発表は鞠智城と他の古代山城を比べて、どこが共通していくてどこが違うのか、といったことをお話をさせていただきます。

さて考古学は、築城時期についてはぴつたりと年代を出すのは実は苦手です。およその年代しか分からぬのです。ということを知つておいていただきたいと思います。なによりいつ・誰が・どのような目的でつくったかというような具体的な物語というのは、文献史学の分野になろうかと思います。そこは後に狩野さんのお話もございますので私はその前座として、考古学でこれまでにわかっていることを中心に整理をさ

せていただき、共通点と相違点から鞠智城の築城年代にたどり着けたらと思います。

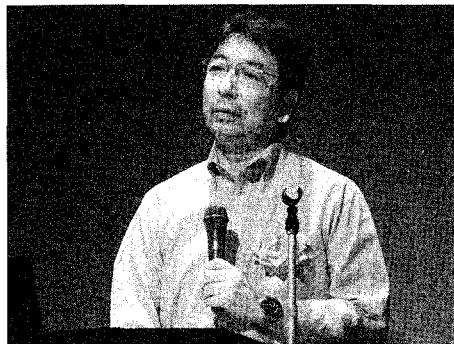


写真2 赤司善彦氏

資料篇の一三頁に古代山城の一覧を載せています。そちらをご覧になりながら、このスライドを見ていただきますと、とにかく西日本一帯に山城というものが築かれているわけです。この白丸で記しているのが鞠智城です。ほかにも白丸がありますが、これらは鞠智城のように文献史料に名称が記載された山城です。それから、山城の名称は史料に出てこないのですが、遺跡として山城が確認されているのが赤丸です。それから文献史料に名称は出てくるのですが、場所がまだわかつていないのが、この塗りつぶしていらない白丸です。これを見ていただきますと、一つは九州の大宰府を中心として固まっているということがわかるかと思います。もう一つは瀬戸内海の両方に分布しているというのがおわかりだと思いません。日本海側にも、四国の太平洋側にも無いのです。つまり九州から瀬戸内にかけて、それから都があつた奈良の方まで幅広の帶状に分布しているというのが、古代山城の分布の大きな特色であります。

さてもう一度資料篇の一三頁の表を見ていただきます。ここには山城の調査成果を簡単にまとめてみました。一九九〇年以降にこの種の山城の調査が全国で本格的に行われてきたわけです。その結果わかつたことをおおよそここに記しています。鞠智城の欄を見ていただきますと、築城時期は黒い棒線を引いていますが、七世紀の半ばくらいから後半にかけて始まっています。終わりは九世紀いっぱい、もしかしたら一〇世紀ま

で延びるかもしないということを示しています。同じように、朝鮮式山城といわれる鞠智城の仲間の大野城、基肄城、金田城、屋嶋城、高安城の存続時期を示しています。これらは考古学的に発掘調査をされて出土した遺物から導き出した年代であります。これらの山城以外では、年代があまりよく分かっていないということがお分かりになろうかと思います。ただし、瀬戸内の山城の三番目に記しています鬼ノ城ですが、この岡山県の鬼ノ城は七世紀後半から八世紀の初頭にかけて存続した山城でして、このように発掘調査によって、中身がいろいろとわかつてまいりました。今後日本の古代山城を考える上で一つの尺度となる可能性が高いと 思います。

右側の欄にはさまざまな個別の特徴について記しています。城壁の立地、石墨や石垣のあり方、土墨列石の有無、それから城門の姿、さらには貯水池の有無などについて、記しています。誤解を与えないようになえて「？」マークをたくさんつけました。この「？」マークは、もしかしたら今後発見されるかもしれないけれども、今の段階では見つかっていないということです。無いとは断定できないとお考えいただければよろしいかと思います。

### 一、古代山城の共通性と独自性

古代山城のおおまかな特徴を頭に入れていただきまして、古代山城の共通性と独自性について話を進めさせていただきます。まず、どういう場所に山城が築かれているかということであります。スライドを見ていただきますと、最近の研究でわかつてているのは鞠智城のお話してもなさいましたが、交通路と関係して立地しているということです。九州ではこの大宰府から四方に道路が出ているわけですが、そういうたた古代の官

道のような国家が作つた道路と非常に密接な関係があるということです。こうした交通路の側に山城が築城されているのです。鞠智城も先ほど「車路」という言葉がありましたが、直線的な古代の官道が整備される前に七世紀の天智天皇の頃に軍事道路とでも呼ぶような交通路が築かれた可能性があります。その交通路に位置する山城の近くにはこの「クルマジ」という地名があるのです。基肄城のそばや大野城のそばにもあります。このように軍事道路と古代山城はセットだった可能性があるのです。残された地名からこのようないどがわかりました。この点では鞠智城も共通しているといえます。

それから山どの程度の高さの位置に城を築くかということですが、大野城の場合ですと標高の高い位置に築いています。最高標高四一〇メートルで、最低標高が三五〇メートルという相対的に高いところに城壁を巡らせてています。この写真は大野城から周辺を眺望したところでね。大野城からかはこういうふうに景色が見えていました。ですので、おおよその高さがお分かりになろうかと思います。平地がこのくらい小さく見えます。これが九州国立博物館で、来月には鞠智城シンポジウムを開催するところです。そしてこちらが阿志岐山城という山城です。このように大野城からも視認できる位置にあります。これは佐賀県基山町の基肄城という山城ですが、これも標高が四〇〇メートルの山の高い位置に土墨を巡らしています。

問題は一番低いところ、城壁の一番低いところをどの辺に置くかということが機能を考える上では城壁の一番低いところがどの程度の高さにあるのかが重要です。山の険しい地形を利用して山の上方に立地する工程、防御性を高めているからです。この基肄城の場合ですと、城壁が一番下に下ったところに南門があり、石垣を築いて水門を作っています。南水門と呼んでいます。かなり低い位置ですが、周辺の平地からすると数十メートル高い位置にあります。

これら古代山城の最低地点の周辺との比高差と、城壁全体の長さをグラフにしたのがこの図です。五番の赤丸、これが鞠智城です。これは何を表しているかといいますと、縦軸が比高差です。城壁の平地からの高さです。横軸は城壁の長さ、二キロ、四キロ、六キロ、八キロの表示がありますが、規模を示しています。細かく分けるといろいろ分けられるのですが、要は大きく分けるとやはり山城の中で周辺の平地とほぼ同じ高さに築くタイプと、それから少し上方に、平地とは違う高いところに設けるグループがあるのですが、さらにその中でもいろいろグループ分けをすると、例えば一番は大野城、二番が基肄城です。一番低いところで一五〇メートルくらい。一番高いのは鬼ノ城ですが、二五〇メートルくらいですね。これに対して鞠智城の場合はそれほど高くない場所に立地しています。但し、他に例がないかというとそうではなくて、七番は同じ文献に記載があります対馬の金田城ですね。同じような標高に立地していることがおわかりになるのではないかなと思います。

こういう点では一緒なのですね。それからもう少し同じような例を見てまいりますと、これはお城の城壁線の使い方ということで写真を出しました。高松の屋嶋城です。山の上の高い位置にあります。次は、城壁が海の側まで下りてきています。これは金田城ですね。金田城はずつと一番高いところまで城壁が上目につっています。それでも一番下までは下りてきていないですね。少し高いところにあるということになります。これは金田城の城壁から海を見たところであります。こういうふうに築かれているわけです。

それに対しても平垣地がたくさんあるということですね。鞠智城の位置する丘陵の側にももつと高い山はあるわけですが、敢えてこういう平坦地のある立地を選んでいるというところがやはり鞠智城の特色の一つではな

いかと思います。しかも、発掘報告書を読みますと鞠智城が築かれる直前までは古墳時代の集落があつたということがわかつています。住環境としてもいい場所に山城を築いたというのが他の山城にない立地の特質ではないかなと思っています。

次に少し城壁の違いをみていきます。これは先ほどの屋嶋城ですが、屋嶋城は山の頂上が平坦で、山全体が屋根のような形をしているところから屋嶋という名称が付きました。もう少し近寄って見てみると、このように自然の崖があります。それが天然の城壁に利用されています。鞠智城も東側では崖線を利用していますので、よく似ていると思います。古代山城は山の地形を最大限に利用しているというのが大きな特色であります。山というのは急な崖があつたり岩があつたりするのですが、隠れるにも都合がいいし、それから攻めあがる方も大変な訳です。そういう点では鞠智城もこの屋嶋も大変よく似ているということが言えるのではないかなと思います。

さて、城壁は谷間を渡る時には土壘ではなくて石墨を築くわけです。これは大野城の百間石垣という、一間は約一・八メートルですので全長が一八〇メートルの石垣を築いています。こうした石積みが築かれるのも古代山城の特色であります。鞠智城にも同じように石積み遺構があるのですが、残りが良くないので本来の形状がわかつていらないところがあります。先ほども出てきましたが池ノ尾門跡に石墨があります。谷筋を塞ぐように石墨があり、谷の方向に通水口、水の通り道である暗渠を築いていることもわかつています。

次に古代山城のうち、文献に記載のある金田城ですか大野城、基肄城、屋嶋城の発掘調査が行われていて、その石積みを見ていくと、およそわかつていることは先ほどの表にも載せていますが、全て自然の石を割つて大きさを整えたものを使っています。それ以上の加工はしていないのです。いうことがわかつ

ていまして、それは一三頁の表に載せてあります。加工の石を使うのではなくて、自然の石を使うというのが鞠智城にも共通した石工の技術ということになります。この写真のようにこれが唯一残っている石墨の正面です。こういう小振りの石は、大体人の頭くらいより少し小さいくらいの石ですが、そういう石は実は他の古代山城ではあまり使っていないですね。石材の大きさが他の山城と違う点だと思います。

ところで最近、金田城、大野城、基肄城の調査で積み石を築く時に数段並べて、これを単位にして何段も築いていたことがわかりました。しかも内部も含めてです。その単位の上端部分は平坦な面をつくつて重ねていくという工法がとられていることがわかりました。屋嶋城だけは少し崩れが激しくてよくわからないのですが、金田城とそれから最近佐賀県の基肄城の解体調査でそういう石積み工法があるということがわかりました。これが一つの特徴だとすると、鞠智城でも見られるといいのですけれど、今のところ残りが非常に悪くて、よくわからないというのが実状です。

それからこの写真は大野城の水門です。石墨には水門を設けて雨水を排水する施設があるのも特色の一つです。写真は、ちょうど水口の部分ですね。土墨の中にこういう石積みの通水口が設けられます。次のこの写真は古代山城の中でも神籠石と呼んでいる城なので、直接の比較をするのはよくないとは思うのですが、鞠智城の水門によく似たタイプと考えられます。石積みの溝を通して蓋石を載せていくというものです。たぶん、鞠智城もこういうタイプのものではないかなと思います。それからこれは基肄城の水門です。これは今でも人が中を通ることが可能な大きさです。こういった石積みが必ず石墨と水門、その横に城門があるということがセットになつていて、そういう点では池ノ尾門跡も城門と水門のあり方は共通しているといえます。但し、その石積みが少し違っているわけです。この写真の金田城の場合、上の方は近世に積み直さ

れたものです。この積み石の下の方の少し丸い自然の石を使つた部分が古代の石積みになつています。これが屋嶋城の石垣でして、これもやはり自然の石をたくさん使つてることがお分かりになると思います。かなり崩れてしまつていて、あまりよくわかつていません。

## 二、古代山城の城門と鞠智城の築城年代

それから山城の出入り口は防備を固めるために強固な城門を設けます。昔は山城の城門は平坦な門ばかりだと考えられていました。屋嶋城でわかつたのですけれども、この写真は城門です。入り口の前に段差があります。つまり、門から内部に入るためには、ここに梯子のようなものをかけなくてはいけないということです、懸門(けんもん)と呼んでいるタイプの城門が発見されました。梯子を外せば人は入れないということになります。こういう懸門が実は大野城でも見つかりました。この写真ですが城門の手前に懸門という段差があります。段差を登つて中に入らなければいけないということですね。それからこれも大野城の門の一つなのですが、門に入ると階段になつています。

こういう城門については、先ほどの一三頁の表を見ていただきますと、懸門とあるのが大野城と屋嶋城、それから岡山の鬼ノ城にあるということがわかつています。それと平門といつた平坦な門も大野城、基肄城、鬼ノ城にもあるということです。さらには階段状の段差を持つというのも大野城と金田城、それから鬼ノ城にもあるということがわかつてまいりました。このように最近の古代山城の調査で一番大きい成果が城門の構造についてだろうと思います。

この写真は大野城の北石垣城門というところで、上から見たところです。ここに門の柱がありますがここ

で茶色の鉄製品が出土しています。これを横から見るとこういう形をしています。取り上げますと、こういう上部がお椀のような形をして、下が四角い立方体になっています。これは城門の扉軸を受ける穴です。つまり先ほどのものはですね、上のお椀形の部分が扉の雌型の金具と合わせて、扉を回転させる金具です。下部が四角なのは、金具が動かないようにがつちりと礎石の穴に嵌まるようになつていています。この四角の部分が礎石の穴に嵌っているので、上のお椀のような丸い部分のみが見えているのです。こういう金具が大野城で見つかったわけです。

こうした城門の扉のある礎石を模式化して書いてみました。発掘調査ではこういう城門の礎石が検出できます。からいじき唐居敷とも言うのですが、本来の意味では唐居敷というのは木製のもので、しかも寺院などで使用されているものですので、古代山城では用語としては使わないほうがいいかと思うのです。礎石に柱を立ててその横に方立ほうだてといいまして扉と柱の間に隙間ができるまで、そこを隠すものとして方立の材が必要なのですですが、省略されることもあります。それからもう一つここに扉の軸を受ける穴があります。こういう扉軸受のある礎石は、都の宮殿や大寺院などで、見受けられますが、地方の古代の役所では少ないので。それが古代山城には伴います。

このスライドの図は、これまでに古代山城で出土している礎石をいくつかのタイプに分けてみたものです。本来は一元論といいますか、考古学的には一つのものから派生して、次の時期に新しいタイプが生まれたという系統図ができればいいのですけれど、そこまでは整理できませんでした。

図の左下にあるのが鞠智城の堀切門から出ている門礎です。黒い丸が先ほどの扉の軸を受ける穴を示しています。それからえぐりが両サイドに入っています。このえぐりは城門の柱が動かないように嵌め込むため

のもので、柱の径に合わせるようにえぐりが入っているのです。こういったものが堀切門跡で発見されます。この鞠智城の堀切門はいつ頃のものなのかということを、他の古代山城の城門の礎石と比較して位置づけてみたいと思います。

これまで判明している城門の礎石の中で一番古いものが大野城の北石垣城門跡、小石垣城門跡の門礎です。軸受の穴が四角形をなしています。先ほど写真でお見せました鉄製金具の下が四角いものですね。それから方立があつて、掘立柱のタイプで、方立も同じですが軸受けの穴は平面が円形です。もう一方で同じ大野城の水城口城門跡の場合は、掘立柱のタイプで、方立も同じですが軸受けの穴は平面が円形です。韓国の城門の軸受金具には二種類あります。どちらが古いとはいません。おおよそ同じ時期に両者が日本では出現しています。ただし、水城口城門の円形軸受金具の門礎には、蹴放けはなしといいまして、門に横材を通しまして、その横材を受けるために溝状のえぐりが礎石に入っているのです。こういう全部揃つたものが古いのかもしれませんけれども、一応同じ時期に二つの軸受金具のタイプが出現してまいります。

それから系統としては掘立柱なのですが、岡山県の鬼ノ城で発見されたのが柱の形状が四角いタイプのものですね。角柱で、軸受けの穴はやはり大野城と同じ四角です。それから方立ても備えています。このようになります。柱のえぐりと軸受金具の穴、そして、方立の三つが少なくとも揃っている礎石が最も古い城門礎石と考えられ、その後、改良発展しているのは間違いないです。鬼ノ城の四角い柱の礎石は大野城でも見つかっています。このタイプの系統は、長く続いて七五〇年代に築かれた怡土城にまで引き継がれています。

こうした変化を前提にして鞠智城の城門礎石の位置づけを考えてみます。大野城の水城口城門で一番古い

ものがあるのですけど、その後に大宰府口城門の蹴放しは無いのですが、円形の軸受穴と方立、それから掘立柱の凹柱を用いたタイプです。これが古代山城の最も古い時期のものです。次の時期にこの方立が省略されるようになります。扉と柱の間の隙間をうめる独立した材が無くなってしまうのです。それがこの鞠智城の堀切門のタイプだということになります。そして、次の段階で、さらに城門の柱が礎石立に変わります。建物の建築様式も屋根に瓦を拭くなど大幅に変化した結果でしよう。そしてさらに次の段階で、柱の下面を動かないように丸く壅めるということをやっています。これが礎石ではどのように現れるのかと言いますと、円形のホゾ穴になつてているのです。金田城の縄文の変遷からわかつています。同じ古代山城から発見されたものは黒い矢印でその変化を示し、想定としておそらくこのタイプから次のタイプに変化をするのではないかなと思うものを点線で示しているのです。

こうやって見ていきますと鞠智城で発見された城の門礎は、どうも天智朝の大野城で見つかっている礎石より、遅く作られ少し時期幅がありそだだということがおわかりだと思います。鞠智城の築城年代としては、遺物の上ではほぼ同時期と見て良いのですが、城門の礎石のつくりからすると時期が異なるということになります。ただし、見つかっている礎石が建て直しのもので、築城期の礎石は廃棄されていることも考えられます。方立を持つようなタイプが鞠智城から今後発見される可能性はあります。なので、今の段階では鞠智城が大野城や基肄城と同じ六六五年に築かれたということはいえません。

基肄城もまだ詳細な発掘調査が行われていなくて、基肄城の城門も鞠智城と同じタイプのものしか今のところ見つかっていません。鞠智城と同じなわけです。城門礎石から築城年代を導き出そうとしてもなかなか簡単ではありません。今後の調査の可能性としてそういうことも少し考えていかなくてはいけないと思

います。

### 三、大野城と鞠智城の建物変遷

鞠智城では倉庫などの建物がたくさん見つかっているという話がありました。この建物群についても他のものと比較をしてみると、この写真は大野城の倉庫の並んでいる様子です。地形的には段がありますが、そこに整然と並んでいる様子が窺えるのではないかと思います。大野城の建物は鞠智城と一緒にで、穴を掘つてそこに柱を直接据える掘立柱の建物ですね。それから瓦を載せるので、瓦が沈まないように柱の下に礎石を置く礎石建物の二種類あります。

実は、大変興味深いのがこの礎石の建物がほとんど総柱です。重たいものを載せるために床が抜けないよう荷重を分散させるためにたくさんの柱を置くのですが、これを総柱建物と言います。それから私たちは建物の規模をいう場合に、柱の数が例えばこの青く塗っている部分を見ていただきますと、六本あります。つまり柱の間は五つということになるので五間と言います。縦と横方向を数えてこの写真の建物の場合は三間×五間の建物というわけです。

大野城の建物の中では、総柱の建物で三間×五間というのが非常に多いのです。全部で三三棟あります。時期は多少の幅がありますが、これが全て同じ規格なのです。柱の長さ、建物の平面形など設計が統一されています。プレハブ住宅と同じように、材から何から全部揃えて、その規格と違うものは作らないというくらい厳密な規格があつたようになります。奈良時代の律令国家をまるで象徴するような規格性を重視した建物が一番多いのです。その後の三間×四間という規模が小さくなるのですが、それも十一棟見つかっていて、

これも全て同じ規格です。ですから大野城の場合は非常にわかりやすいのです。

この建物の図を見てください。礎石建物で三間×五間ですが、その周りにもう一つ掘立柱が廻っています。これが鞠智城でも見つかっているのですね。この性格についてはよくわかりません。昔はこの建物の周りに目隠し塀を立てて封をしたのではないかと考えたことがあります、それにしては柱筋がきれいに通っていますので、建物の構造の一つであろうと考えられます。建築史の方もやはりそのように考えているのですが、どういう構造の建物になるのかはわからないようです。結論として掘立柱を必要とした建物だということです。構造はわからなければ必要だつたということで、よく分からぬといふ結論です。ちなみに金田城からも見つかっています。

大野城の建物の変遷について構造をもとに整理してみます。掘立柱の建物でも側柱がわばしらという土間構造の建物が最初に建てられています。その次に総柱の倉庫となる掘立柱建物が七世紀の後半頃に建てられます。八世紀前後頃にはそれらが礎石建物に変わります。瓦葺きの屋根になるのです。鞠智城でも桁の長い規模の大きな倉庫の礎石建物が発掘されています。その後に、先ほど述べました三間×五間の掘立柱を併用した建物が建てられます。大野城の場合にはこの建物に基壇きだんを持つてているものがあります。基壇というのは建物の床面を固くしめたものです。そういう立派な建物もつくられています。その後に、八世紀の終わり頃に、三間×五間の掘立柱が周りにも無く、無基壇のものに、全て建て替えられてしまいます。それはたぶんそのまま一〇世紀になつてもそのまま使われ続けたようですが、その三間×五間の建物のさらに外側の方に空閑地を見つけて建てたのが二間×四間の礎石建物です。規模は少し小さくなりますが、それが平安時代に建てられ

るようになりました。倉庫を同じ場所に追加して建築しなければならない事情ができたのでしょうか。

結論から申しますと大野城も鞠智城もほぼ同じような建物の変遷をしてはいます。ただ、大野城では柱筋を揃えて整然と配置しているのですが、建物の規模もまったく同じという徹底ぶりです全部同じ建物が並んでいた景観だったのです。規格性が非常に強いのです。規制も強かつたということが窺えます。それに対しで鞠智城の方はどうちらかというと建物の種類もいろいろ豊富です。企画性はあるのですが、大野城と比べると、規格性にそれほどこだわっているようにはみえません。自由度も高いということになるのでしょうか。そういう違いがどうもあります。鞠智城には八角形の建物もあります。大野城はそこまでの自由度は見られません。何か規制が非常に強いということが言えるのではないかと思います。

#### 四、鞠智城の貯水池

築城時期の話から次に、この貯水池についての考えを述べることにします。一三頁の表を見ていただきま  
すと右の方に貯水池の有無を記載しています。今のところ確実なのはこの鞠智城のみです。それから白色で示しているのは、調査がされていないので正確性はないのですが、おそらく飲料水等を確保していた施設であろうというものです。大野城と基肄城にも規模は小さいのですが貯水池らしきものがあります。それから岡山県の鬼ノ城でも貯水池が見つかっていまして、これは谷筋を堰き止めた水門とセットで貯水池があるということがわかっています。それ以外にはこれは御所ヶ谷神籠石で貯水池がありそうだということがわかつていています。これが古代山城の貯水池に関する情報です。

さて、鞠智城の貯水池ですが、地図を見ていただきますと北側に向かって谷が下りています。この谷を堰

き止めるようにしてこの貯水池が築かれています。この貯水池の面積は発掘調査によつて、五、〇〇〇平方メートルあるとういうことが言われています。これまでに他の山城で見つかっている貯水池というの是非常に規模が小さいです。韓国でもそうですが、一般的には規模が小さいです。それはやはり飲料水なりの確保が目的でありますので、それ程大きい必要はないと思います。しかし鞠智城の場合はこれらに比べて大変大きいのです。それから大野城では井戸があります。少なくとも平安時代に掘られたということだけはわかっています。井戸のような規模の小さなものではなくて、大きな貯水池なのです。

この鞠智城の貯水池の用途は何かと云うことですが、これ程大きな貯水池というのは通常は灌漑用を考えた方がいいのではないかと思います。つまり田んぼに水を引くためのものだと考えた方が、的を射ている気がするのです。もちろんこれは考え方の一つだと思ってください。ところで、古代の灌漑・水利施設の例を調べますと、七世紀のはじめ頃に大和や河内などの畿内を中心として灌漑用の池溝の開発記事が見られます。国家的な事業として耕地の拡大や台地の農地化がなされたという記録が出てきます。これらのうち大阪の狭山池という有名な溜め池があるのですが、これが発掘調査されまして、現在は博物館が出来ています。この狭山池の築堤は発掘調査の結果、七世紀のはじめ頃だということが判明しました。七世紀のはじめ頃に全国でそういう灌漑用の貯水池などの施設を築いたということがわかつてまいりました。灌漑用の貯水池を築造することで地域の開発を行うのです。低地ではなくて台地あるいは段丘だんきゅうというような少し高いところの開発のためです。下低地の平野は河川を利用することができます。したがつて、少し高い場所を開発するためには必要な水を引くためには、溜池が重要なのです。

この溜池を築く技術というのは、貯水の水圧や漏水に耐えられる築堤など、非常に高度な技術が必要で

す。こうした築造の工法は朝鮮半島からの渡来人があつたものなのですが、そのため渡来人を住まわせて築いたのではないかと、いうことが推測されるようになつてきました。こうした渡来人による築造記事は畿内が多いのですが、九州にも例があつたと思われます。有名なところでは福岡県那珂川町を舞台にした裂田溝さくたのうなぞという伝承が『日本書紀』に登場します。それ以外でも九州各地にはあつたのではないかと工渠善通先生が研究されていらっしゃいます。

そこで、例えば大野城が位置しています大野城市に、「韓人池」あるいは「唐池」といつた地名がちよつと前の地図に残されている場所があります。大野城跡に隣接する北側の丘陵です。実際に現場に行つてもすでに開発が進んでいるために、その場所は残つていながら残念です。しかし、どうも渡来系の人たちが開発に関わったのではないかと推測されるわけです。付近には七世紀前半の新羅土器が出土する古墳がありますので、渡来系集団が活動した地域であつたと言えると思います。このように、九州にも渡来系集団の可能性も考えた方がいいのではないかなど思つております。

それから、鞠智城の発掘調査ではこの貯水池を築く上で、敷粗朶しきそだという工法が確認されています。これは例として韓国の扶余に宮都への敵の侵入を防ぐために土壘を巡らせていました。これを羅城と言います。扶余の町のはずれに東側なので、東羅城という地点があるので、そこを城壁を築いた時に地下が軟弱地盤であつたことから、最下部に木の枝や葉っぱを敷き詰めています。水分の多い緩い地盤にこういう柔らかい枝葉を敷いて、その上に固い土壘を築造するというのが、この敷粗朶工法です。これは我が国の六六四年に築かれた水城にでも発掘調査で確認されました。発掘した時には葉っぱ青々としていたとのことで、空氣に触れたとたんに茶色に変色してぼろぼろになつていくようです。酸素が全く供給されていませんので、酸化せ

すに緑色のままなのですね。さて、そのような粗朶がこの水城の下部に敷かれていたのです。

この敷粗朶工法は、それ以前には見あたりませんので、渡来系の新しい技術と位置付けて間違いないのです。渡来系集団の技術が導入された遺跡の認定として、この敷粗朶工法は大きなウェイトを占めているのです。こうした技術の痕跡が鞠智城でも見つかっているということなのです。鞠智城の遺構を考えるときに、注意をする必要があるということがあるのでないかなと思っています。

関連して、鞠智城から陽物といいますが男性のシンボルのようなものが出土しています。木製品です。非常に素朴な信仰品として、今日でも集落や神社で祀られています。この鞠智城のものがいつの時代に使用されていたのかは、はつきりしませんが、七世紀台の可能性が考えられています。八世紀の奈良時代になりますと各地での出土例は多くなります。古代の大宰府政府周辺でも出土しています。多くが井戸からの出土です。七世紀の段階だとなかなか例が少ないのでです。これまでには香川県で七世紀前半頃の遺物が出土しています。これは灌漑用に川から水を引く地点で出土しています。それ以外に、難波宮の北の谷からも出土しています。このように類例が非常に少ないです。

さて、どのような用途に用いられたのかよくわからないのですが、この右側に写真を載せていましたのが先ほど敷粗朶の話をしました韓国の扶余の東羅城に接して築かれました陵山寺<sup>りょうざんじ</sup>、陵寺ともいいますけれども陵山里古墳という装飾古墳のある古墳群があります。熊本に多い装飾古墳ですが、王家の陵墓を護るためにお寺があります。これを陵寺と呼んでおりますが、その陵寺の発掘調査で出土した木製品の中に先程紹介したようなこの岡の陽物が出土しています。これは六世紀の終わり頃まで遡る資料です。興味深いのはそのうちの一つに墨書きと刻みの文字が記されていました。文字の内容などから、扶余の都への入り口で邪惡なもの

を寄せない魔よけとして掛けられていたという解釈が平川南先生によつてなされています。それからもう一つは扶余の国立博物館の図録では、この陽物というのはやはり子孫繁栄からはじまつて所謂、五穀豊穣を祈つてそこに置いたものであるとされています。とりわけ扶余が危うくなつてきた時に王家の再興を願つてこの祭祀具を置いたのではないかなという解釈がなされています。

いずれにしましてもこのような陽物は、道に関係すると道祖神といった素朴な信仰などが考えられます。が、渡来系の人たちによつて持ち込まれた可能性も考えておく必要があると思います。もちろん、問題は出土した貯水池がいつまで遡るのだろうかということになると思います。発掘調査報告書では鞠智城とほぼ同じ時期に築かれたとありますが、池から出土している遺物からみるともう少し古い時期に遡るのではないかと思います。七世紀の初頭あるいはもう少し遡つて六世紀代まで遡る資料が貯水池から出土しているようです。鞠智城の城内に鞠智城が築かれる前の集落があつたということです。鞠智城ができると同時にその集落は姿を消しています。そうであれば、そこに居た人たちはいつたいどういう人たちであつたのだろうかと思うわけです。その人たちは何のために居たのだろうかということでもあります。一つの可能性として鞠智城築城に先立つて、周辺地域の土地の開発ということが、もしかしたら行われていたのではないかということを考えられるのです。そのために貯水池が築かれて、開発がなされていて、そうした場所に後に鞠智城が築かれたのではないかというストーリーもあるかと思ひます。妄想に近いかかもしれません。

## おわりに

鞠智城の調査によつていろんなことがわかつてきていくわけです。一つのことを解明しようと発掘調査を

実施すると、さらに倍以上の課題が生まれるのが常です。これまでに鞠智城の調査で何がわかつて、そして何がわかつていなかのか、まさしく今日のテーマでありますけれども、再度、整理することが今後の道筋をつける早道になるのではないかと思います。

最後に、その一つの整理する手法として私が取り組んでいますのが、山城を科学の眼で見ようというもので、ここにまるで脳味噌のような図を出しましたが、これは佐賀県の基肄城をレーザーでスキャンをして作成した図です。空から撮影した写真ですと、ほとんどの場合山の樹木しか写らないのです。ところがレーザーを照射する方法だと、地表面の襞が明瞭に見えるのです。この図ももつと拡大して見ることが可能で、まずはこういう地形が確実にみえるような基盤の図を作つて、この基盤図に調査成果や、壊れそうな所の写真などを収納して、これをもとに検討する方法を研究しているところです。

後ほどの討論にもつながるかと思いますが、鞠智城で他所の山城と一番違うものを一つあげると言われたら、私はやはり立地の違いが大きいのではないかと思います。敢えて平坦地のある台地を選んでいる例は他にはないなと思います。そして、ここが菊池川を溯ると、阿蘇山へと至り、さらには豊後や日向に抜ける交通路ということの重要性も考えておく必要があると思います。今後はそういうことも科学の眼を使いながら新しい鞠智城の研究がなされることを期待して、私の話を終わらせていただきます。

どうもありがとうございました。